

日本学術会議 地球物理学研究連絡委員会気象分科会便り

(1) 昭和43年度国際会議出席者(国費出張)の件
上記の件につき 日本学術会議第4部の枠は21名にま
まりました。そのうち地物研連としては2名の枠が与
えられました。5月1日の地物研連主任幹事会では、
UPM (Upper Mantle Project) 関係に1名、気象関係
(9月トロント市で開催される雲物理国際会議)に1名
の割当てがまきました。

(2) Journal of Geophysics の原稿募集について
Journal of Geophysics は年1回(印刷頁約150頁)
発行されています。去年は IUGG 総会用に、海洋、火
山、測地分科などの総合報告として発行されましたが、
今年は次のような要領で発行されることになりました。

(a) original paper. 学会誌の制限頁をこえるよう
な長い論文も可。

(b) 気象分科会内での活動報告など。

(c) 学会誌などに掲載された論文の要旨(1年間
分)など。

以上のような趣旨で発行されますので、掲載希望者は

10月末日まで原稿を送付して下さい。

原稿送付先: 東京都千代田区大手町東京管区気象台調
査課 河村武

(3) 第11次南極観測について

気象分科会からは“南極高気圧の生成およびその構
造”という研究テーマを学術会議に推せんしました。ま
たそのための観測隊員候補者として安達隆史(東北大)
氏を推せんしました。

(4) IUGG 総会について

1971年モスクワで IUGG 総会が開催されます。他の
分科会は1971年までに各分科会毎の総会を開催すること
になっていますが、IAMAP (IUGG の気象分科会)は
まだ態度をきめていません。この件に関し、IAMAP の
Secretary Godson 氏より日本の意向をきかれましたの
で、日本の気象分科会としては1971年の IUGG 総会ま
では気象分科会だけの総会は開催せず、1971年の IUGG
総会するとき、他の分科会と合同してシンポジウムを開催
することを希望しておきました。(文責 岸保)

〔書 評〕

ジェット機はなぜ落ちるか

(マックレメント著, 南波辰夫, ナツコ・シニア共訳)

原本の題名は、“It doesn't matter where you sit”.
飛行機が全金属機になってからは、機体への電光放電に
よる危険は、そう大きなものではないというのがこれま
での常識であったが、この本では近年の機体への落雷に
よって致命的な事故になった幾多の例を挙げ、ジェット
機は雷雨に対して厳重に警戒せねばならぬことを説いて
いる。

第1章「火の玉となって落ちていく」、第2章「目撃者
が事故原因を指摘する」では、1963年12月8日夜にメ
ーランド州ウィルミントン空港付近でおこったパンアメ
リカンのボーイング707 ジェット機の墜落事故と事故調
査の経過を詳しく書いている。第3章「稲妻の危険」の
中には、1937年以後の電光放電による大事故の約20例を

列挙している。第4章「燃料とその可燃性」では、ジェ
ット機燃料の JPI と JP4 とを比較して、JP4 が火花
放電で発火し易いことから、その危険性を指摘してい
る。以下の章では雷雲中の乱気流による事故について同
じように詳しく説いている。

紹介者がかって南仏ニース付近で中型旅客機で雷雲の
中をつききった経験を書いた時にも、全金属機は少なく
とも電光放電に対しては危険が少ないと書いたのだが、
この書を通読し、今やジェット機時代になって、この常
識は改めねばならなくなったことを知った。本書で稲妻
としているのは、恐らくは lightning で、これは電光と
か電光放電としてほうが気象用語には合うであろう。

(朝日新聞社刊 B6刊 326ページ) (畠山久尚)